



## 道具作りに燃える！

がま研ぎつての多才・多芸の手仕事師、初鹿野さんの手により、デビューに向けて生み出される道具の数々。買えば何でも手に入る世にあって、この世に一つの愛着の品が次々に誕生している。

がまの油売り口上を行うには色々道具が必要になる。これらの道具を一つ一つ手作りしている。今回は四点について紹介したい。

写真1はがまで、材料は新聞紙と紙粘土である。新聞紙を丸めて芯をつくり、その上に紙粘土を使

ってがまの形に仕上げ上げていく。形が出来上がってから

着色する。着色は、ジェーンソンという

木目をふさぐ塗料を紙粘土の上に塗

り、その上にポスターとニスを重ね

塗りした。出来上がったがまは思



写真1

しいので大の二十%増しを桐で、端の組み込み部を2cm間隔で作った。このサイズだと色々なものが収納出来て便利だ。箱の表と裏側にがまの油の文字、左面にがま、右面に筑波山をバーニングペン（焼きゴテ）で焼いて描いた。



写真2

つていたより重い。「ふわふわ紙粘土」という軽い紙粘土と芯に加工し易く軽い発砲スチロールを使えばと反省している。小町塾でこのがまを披露したら陶器の様と言われた。

写真2は道具箱である。

林会長からはジョイフル本田で売っている桐米櫃を買い、焼き込んだ米の字をペーパー鏝で削りとって使えばよいと教わった。売り場に行き米櫃を見た。米櫃は大・小あったが、少し大きいサイズが欲

写真3は幟と垂れ幕である。

以前、リサイクルショップで買ったサテン生地があった。これを使うことにした。文字部はフェルト生地とした。初め、勘亭流文字を紙に写し取って型紙を作り、これをフェルト生地に写して切り抜き、サテン生地に縫い付けた。これが写真に向かつて、右側の二つの幟と垂れ幕である。この作業は結構面倒で、時間がかかる。そこで、サテン生地に直接文字を写して、油性マジックインクで塗ることにした。これが中央と左側の幟である。中央の黄の幟は竿に取り付ける上端と左端を袋にした。この方が布は多少多くなるが簡単で時間の短縮になった。他に藍、小豆、緑、黒の幟を作る予定である。沢山の幟ががまの油売り口上実演の時、応援してくれそうで心強く思うからである。道具作りは楽しく、時間を忘れさせてくれる。これからも色々な道具を手作りしていきたい。

初鹿野 寛一



写真3

掲載も三回目となりゴールへ少し急ぎます。

石岡を過ぎて

**稲吉宿の本陣跡** 現在非公開

**中貫宿の本陣跡**

現存する水戸街道の本陣は砦を加えて3ヶ所のみ。一八六四年天狗党の焼打ちに合うが、直ぐに再建。土浦市文化財。

**板谷の一里塚**

土浦厚生病院の近くの街道の両側にある、円墳形のこんもりした築山。

**真鍋小学校の桜**

一九〇七（明治四十）年に植えられたソメイヨシノの巨木が五本、校庭中央にある。真鍋小の移築記念に植えられたもので県指定の天然記念物

**荒川沖宿**

昔、乙戸沼を源に乙戸川が流れ、大湿地帯であり関東特有の荒川の性格を持つていたので地名になったと推測される。

**牛久宿**

譜代大名山口備前守（一万七千石）の領地で陣屋が置かれていた。江戸から十六里。

**小川芋銭記念館**

牛久が生んだ画聖。牛久沼をこよなく愛し伝説の河童の絵を好んで描いた。晩年に建てた「雲魚亭」で作品を一般公開している。

**若柴宿**

一八八六（明治十九）年の大火でほとんど焼失。当時の宿場を示すものは残っていない。ただ、台

# 水戸街道歩き旅

地に集落を形成し、広い敷地に立派な建物が並ぶ三十戸ほどの町並みは驚くばかりである。

**取手宿と本陣**

取手は「砦」の意。古くは城砦があった。藤代と同時期に宿場に指定され、利根川の水運で大いに栄えた取手本陣は一七九五（寛政七）年に再建されたすばらしい茅葺屋根。利根川大橋を渡ると江戸に近づく感あり。

**我孫子宿**

水戸街道と成田街道の分岐道で本陣と脇本陣が置かれた。「一本刀土俵入り」の舞台。

**豊四季** など地名の由来

一八六九（明治二年）明治政府により東京在住の旧士族出身者や失業者救済のため、旧幕府により牧の開墾事業が計画された。開墾順に数字が付され、地名が付けられた。

## 清 水 泰 清

- 初富（鎌ヶ谷市）
- 二和（船橋市）
- 三咲（船橋市）
- 豊四季（柏市）
- 五香（松戸市）
- 六美（松戸市）
- 七栄（富里町）
- 八街（八街市）
- 九美上（香取市）
- 十倉（富里町）
- 十余一（白井市）
- 十余二（柏市）
- 十余三（成田市）
- 多古町

**小金宿**

室町時代後期に築城された小金城の町場に由来す

る。寛政年間の記録では本陣脇本陣の他に水戸藩専用の本陣（小暮家）も置かれていた。

**松戸 戸定が丘歴史公園**

水戸藩最後の藩主徳川昭武の建設した別邸。一九五一年、松戸市に寄贈。徳川家伝来品や兄慶喜の遺品が多く收藏されている。

江戸川を渡り念願の府内入り。金町、千住から日本橋へ。一一七キロを十二日かけて到着しました！

### Ⅰ氏 秘伝の大根漬け

これだけは、おっ母に任せられない！  
秘伝の大根漬けのレシピを特別に公開していただきました。

#### 材料

- 大根 6キロ
- 砂糖 1キロ
- 塩・酢 各1合

#### 作り方

きれいに洗った大根を調味液に漬け込むだけ。皮をむいたり分割すれば早く漬かる。やさしい味だ。



### 新緑の筑波路めぐりハイキング(小田方面)

昨年は天候に恵まれず、延期・中止となってしまったハイキング。今年こそは・・・。  
小田城跡を始め沢山の歴史遺産と、のどかな風景が楽しめます。ご家族・お友達も誘って一緒にどうぞ。

期 日：平成24年5月19日(土)

集 合：午前9:45

旧筑波鉄道 小田駅前(右の地図P)

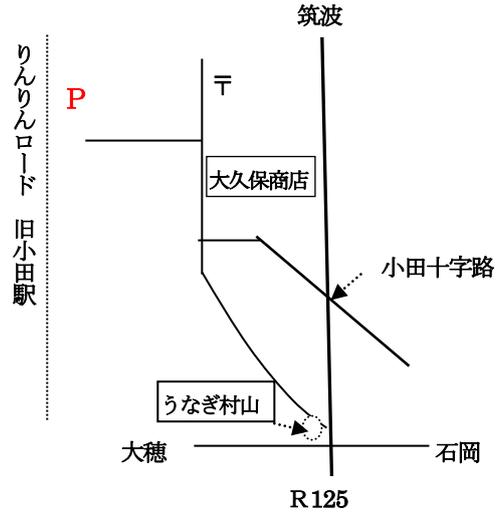
案内人：郷土史家 井坂 敦実 氏

持ち物：弁当、飲み物、タオル、帽子など

申込み：5月10日(木) 締め切り

練習会支部の代表者または林会長まで

小雨決行・荒天中止



### つくばね会練習風景

富山 田津子

おだやかな冬の午後。

二月の第二日曜、菅原公民館での練習風景です。練習例会は、お茶を飲みながら、事務連絡、出席者の近況報告から始まります。

(おやつは、シュークリーム、おせんべいでした。) この日は池田さん、市村さんは、別室で掛け合

い口上の練習もしていました。この女性2人の自主練習を見ていると、真剣に口上に向き合っていて美しい。

見てくださる人達に対しての心がこもっています。練習は、この日は4人ほど。前に出てやるのですが、それをずらっと横並びで見守ります。

(とてもやりづらい)

月に1回の練習会ですが、わあわあ騒ぎながら、楽しく過ごせる貴重な時間です。



大震災から始まった三月十一日。電気も水道も止まり、頼りは携帯ラジオだけでした。

私の年代では終戦の頃を思い出し、着たまま寒い一夜を過ごしました。

余震の続くなか片づけをしていると、津波原発事故のうわさ。隣に東海村をひかえたこの町の恐怖は福島と同じでした。

東京で一人暮らしをしていた姉が病院で亡くなったと、ようやく開通した電話で届きました。津波で亡くなる人、行方不明のままの人、人の人生は、なんと計り知れない事が起こるものなのでしょう。

復興副大臣を各被災地から出して国会と結び、直ぐにやるべき事はいくらかもあるのに、私も何かしなくては・・・と、もやもやしていたのです。タイミングよく水戸のある観光会社と県社会福祉協議会共催のボランティアバスを知り、すぐに乗りました。行く先は宮城県東松原市の〇〇地区。宮城県ボランティアアセスター指揮のもと、奥松島復興プロジェクトに入りました。

大きな漁船が二階の屋根に乗っています。クレールン車が倒れて家屋はメチャクチャ。

私の力が小さくても、何かの役に立てば、いや立てないかと、運転免許のない私は、朝四時半、夫に送られて市役所の駐車場に來ます。定員四十二名のバスは満員です。若い人が多くて県南の取手・守谷からの方も見えました。ボランティアは全くの自己完結型で、被災地の負担にならないよ

# 震災とこころ

清水 慶子

う弁当以外の作業用グッズをすべて持参します。スコップ・チリトリ・バケツ・雑巾、夏場は蚊取り線香も持ちました。家の泥だし、片付け、側溝清掃、草刈り、花壇づくり、牡蠣養殖のいかだ作り、復興祭の手伝いもさせて頂きました。作業の終了は十五時。またバスにゆられて那珂市役所に二十時三十分頃着きます。水戸発二十一時の上り特急に乗る人がいるので、この時間は正確に守られました。今までにやったことの無い仕事ばかりで、これは自分のため

にしているんだ、と思えるようになりました。今までで宗教の面からものを考えたことはありませんでしたが、ふと熊野古道を歩いた人は何を考えていたのだろうか？私も歩いてみたいなどと考えました。和歌山地方は秋の台風で行けなくなりましたので、そうだ・・・とエルサレムに行きました。

世界三大宗教のメッカには実にたくさんの人々です。ユダヤ教の「嘆きの壁」で祈っている人達に混じって壁に触れてみました。何と、心が落ち着くのです。永平寺の修行僧が壁に向

つて座禅を組む姿も、心の状態は同じなのでしょう。か？世界の人々の心はそう変わりないと思えますが、一部の人たちが国



「嘆きの壁」で祈る人々

盗り合戦をして平和が脅かされるのです。今まで宗教には関心がなかった私ですが、モーゼもキリストも実在したかもしれない、と思えるようになってきました。これが宗教や哲学の始まりなのかなとも考えました。

震災復興は支援復興に変わりつつありますが、この先何十年もかかるでしょう。特にセシウムで米の出荷停止があった私の実家の福島県は厳しすぎます。

年が明けてからはボランティアの人たちも減少気味です。私も健康に注意して頑張り続けたいと思っております。

復興の願いを胸に、人としての心に突き動かされ頑張っておられる清水慶子さん。現在も片づけや炊き出しにと現地向かわれる奥様を送迎し、食材提供を担う畑にも向かわれる夫、泰清さん。頭の下がる思いで掲載させていただきました。震災から一年が過ぎ、この教訓を風化させることなく息の長い支援として何ができるのか？それぞれの心が試される気がします。

## 編集後記

継続は力なり...かわら版も二十四号発行の運びとなりました。多士済々の皆様の秀でた活動はもちろん、足元に転がる心温まるエピソードなどお届けいただければ幸いです。七月中旬をめぐりにお寄せください。

編集子